HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ドストエフスキーと催眠術
Author(s)	安藤, 厚; 越野, 剛
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 102, 1-13
Issue Date	2000-12-20
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33986
Type	departmental bulletin paper
File Information	102_PL1-13.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北大文学研究科紀要 102 (2000)

ドストエフスキーと催眠術

安藤　厚
越野　剛

1

ドストエフスキーのリアルで迫力ある心理描写については，すでに多くのことが語られている。とりわけ，精神分析の手法を用いた研究は，フロイト自身のものをはじめとして数えあげればきりがない。しかしドストエフスキーの作品と同時代の精神医学の関連に目を向けた研究はそれほど多くない。ドストエフスキーはフロイトを知らなかったのだから，それは当然ともいえるが，フロイト以前の医学も人間の心理について多くの考察を行っており，ドストエフスキーはそれをよく知っていた。例えば無意識の概念は，ドイツの自然哲学を通じてロマン主義の時代にはすでに広く知られていた。それは多様なもので，オカルト的なものから，フロイトやユングの概念の萌芽までをも含んでいた。ドストエフスキーも当然そうした諸概念の影響下で人間の無意識を意識的に書いたのである。

人間の精神構造に関する理解の歴史を考える上で，F. A. メスメル(1734－1815) に始まる催眠術の流れは重要である。催眠術は当初「メスメリズム」「動物磁気」あるいは単に「マグネチズム」と呼ばれた。それは，メスメルが催眠作用の原因を磁力に似た見えない流体に帰したからである。スコットランドの医師ジェームス・ブレイドは流体説を否定し，暗示を重視して，1840年代に「催眠術 hypnotism」という術語を提唱したが，すぐには広まらず，

ドストエフスキーにはこの語の使用は見られない。「マグネチズム」は「磁力」と訳されることが多いが，催眠術のニュアンスの強い言葉で，日本語にするのは難しい。

ドストエフスキーが催眠術を知るに至った源泉は3つ考えられる。同時代の医学文献，それに影響を受けた諸外国，およびロシアの文学作品である。[1]

メスメリズムはロマン主義の運動と結びつくことが多く，ドイツ経由でロシアのロマン主義文学にも影響を与えた。「マグネチズム」を取り上げた文学作品には，眼差しの持つ磁気催眠的な力と，催眠下で開かれる無意識の内面世界という2つのモチーフが特徴的である。

H. グレチのベストセラー小説『黒衣の女』には，主人公ケムスキー公爵にメスメリズムの真理を説くアリマリという人物が登場する。催眠術に否定的なフランス科学アカデミー会員に決闘を申し込もうとするほどの信奉者で，「ただ意志の力によって，あなたを見ていない人を振り返らせることができる〈…〉そのためには背後からでも何秒間かその人を凝視して，ただその人のことだけを考えなくてはならない」[2]と言う。実際に公爵は劇場で恋するナターシャを振り返らせることに成功する。

アリマリと違い，H. メリグノフの『あいつは何者』のヴァシアダンは催眠術を悪用し，炎のような視線で人々を金縛りにして，ヒロインのグラフィラを誘拐する。

> それから恐ろしい形相のヴァシアダンが（この時の彼は本当に恐ろしかった）病気のグラフィラの横たわっている寝台に近づいた。その目が異常な光に輝き始めた。病人は体を起こしたが，黙ったままで，死んでいるようだった。それから寝台から降りて，床に立ち，よろめいた……けれどヴァシアダンの新たな眼差しがまるで彼女を生気づけたかのように，彼女は踏みとどまり，姿勢を正して，静かな足どりで導き手の方へ歩み寄った。[3]

磁気睡眠下で生じる幻覚は，当時の怪奇幻想小説ではしばしば予言や千里眼として解釈された。B. オドーエフスキーの『コスモラマ』では，これが隠された人間の内面世界，もう一つの人格として現れる。ある登場人物の分身は幻覚の中で「そいつを信じるな，〈…〉あるいはおまえの世界にいる私を信じるなと言った方がいいか。あそこでの私は自分が何をしているのか知らな

いが，ここでの私は，おまえ達の世界では無意識の衝動という形をとる自分の行為を理解している」[4]と言う。「あそこ」とは現実世界，「ここ」とは幻覚の中のもう一つの世界である。後者はプラトン的なイデアの世界とも，人間の無意識の世界とも言える。意識と無意識，現実と幻想の間を揺れ動く主人公ヴラジミルや『黒衣の女』のケムスキー公爵は，そのオカルト的な色合いを取り除けば，『主婦』のオルドゥイノフによく似ている。

ロシア以外でも，ディケンズ，バルザック，E. T. A. ホフマン，ポーなど，ドストエフスキーに影響を与えた作家達は，いずれもメスメリズムに深い関心を抱いていた。特にバルザックは自分が磁気催眠力を持っていると信じていたほどで，彼の小説の登場人物もしばしば磁力を帯びた眼差しを持つ。ドストエフスキー訳の『ウジェニー・グランデ』でも「マグネチズム」(磁力)の語が使われている。

> 若い娘の優しい心遣いの中には共感の磁力とでも言うべきものがある。シャルルは厭でも気づかざるをえなかったし，従姉妹の愛情ある可愛げな気配りには抵抗できず，言葉にならぬ優しい感情に輝いた視線を彼女に投げかけるのであった。そんなとき彼は彼女の顔の魅力と調和の全てに，振る舞いの無邪気さに，そして若々しい恋心と知られざる願望がきらめいている磁力を帯びた眼差しの光に気づいた。[5]

流刑前のドストエフスキーにはすでに，精神の病，おそらくは，てんかんの兆候があり，彼自身はこれを卒中とみなして，ヒポコンデリーになるほどに恐れていた。1846年のひどい発作の後で，彼はコーヒーや肉は健康に良くないから食べないようにと繰り返し書簡に書いている。当時彼を治療していた医師ヤノフスキーの回想を見ると，自分の病気への関心から，彼が当時の医学書をよく読んでいたことが分かる。

> 文学作品のほかに，ドストエフスキーはわたしのところからよく医学書を持っていったが，それは主として，頭脳や神経系統の病気だとか，精神病だとか，古くなったとはいえ，そのころはまだ通用していたガール方式による頭蓋骨の発達などに関する解説書だった。[6]

ドイツ・ロマン派の医学者の間では夢や無意識に関する論考が多く現れたが，ドストエフスキーとの関連で名前がよく挙げられるのはC. G. カールスである。彼の著作はロシアでは先に取り上げたオドーエフスキーが早くから

注目していた。流刑地セミパラチンスクで，ドストエフスキーと友人のヴランゲリはカールスの代表作『プシュケー』(1846) をロシア語に翻訳する計画を立てている。[7]

カールスは人と人の間に磁気による影響関係が存在すると考えた。ギビアンによれば，ドストエフスキーの作品の登場人物の間には，しばしば同様の磁力が働いている。

> 特に密接な「磁気的な」関係が存在するのは，分身や「もう一人の自己 alter ego」による様々なペア，ラスコーリニコフとスヴィドリガイロフ，ムィシュキンとロゴージンなど，その親和力を通じて特別に容易なコミュニケーションを持つ者同士の間である。ムィシュキンやアリョーシャ（そして全ての子供と多くの女性）は，その生活の大部分を無意識に依存しているせいで，あらゆる類の予兆や磁力に対して非常に敏感な人々である。[8]

磁気催眠にかかりやすいタイプとしてムィシュキンとアリョーシャ・カラマーゾフが挙げられているが，そこには『主婦』のオルドゥイノフや『虐げられた人々』のアリョーシャ・ワルコフスキーも付け加えることができるだろう。

2

ドストエフスキーの初期作品の中でも『主婦』はロマン主義的な怪奇幻想小説の色合いが濃い作品である。主要なプロットは3人の登場人物，オルドゥイノフ，カテリーナ，ムーリンの間の心理的な闘争である。その複雑な人間関係の描写で重要な役割を果たしているのが眼のイメージである。視覚に関わる言葉「眼 глаза, очи」「眼差し взгляд」「見る смотреть, глядеть」の使用頻度も高い。[9]『主婦』で眼のイメージが持つ機能は，メスメリズムにおける「磁力を持った眼差し」と似ている。カテリーナはムーリンに支配されているが，この心理的従属は催眠的なものと考えられる。オルドゥイノフは彼女に一目惚れし，邪悪な主人から彼女を解放しようと試みる。

眼の描写が特に目立つのはムーリンの場合である。オルドゥイノフが教会で初めてムーリンとカテリーナに出会う場面を見よう。

老人は背が高く，しゃんとしており，頑丈そうだったが，痩せて病的に青ざめていた。一見したところ，どこか遠方から来た商人のようだった。毛皮の裏地がついた丈の長い黒くて見るからに晴着のカフタンを羽織っている。カフタンの下には，上から下まできっちりとボタンを留めた裾長の何か別のロシア服が見えていた。むき出しの首には赤色が鮮やかなハンカチを無造作に巻いていた。手には毛皮の帽子を持っている。長くて細い，白くなりかけたあご髭が胸に届いていた。しかめた垂れ眉の下で，炎のような(огневой)，熱で充血した(лихорадочно воспаленный)，傲慢で(надменный)執拗な（долгий）眼差しが光っていた（1,267－268)。[10]

老人の商人風のいでたちが詳細に描かれてはいるが，ここの外見描写で強い印象を残すのは，４つもの形容詞を重ねられる「眼差し」であろう。この先もムーリンの表情や身ぶりは，眼の動きに言及しながら描写されることが多い。同じ場面にはカテリーナも登場するが，プラトークをかぶり「眼を伏せて」いるため，彼女と対照的なムーリンの眼のイメージが一層強まっている。老人の目や眼差しには「胆汁質の желчный」「あざけるような насмешливый」「悪意のある злобный」「さげすむような презрительный」などの形容詞，「光る сверкать」「燃える гореть」などの動詞がしばしば使用される。

ムーリンの眼の支配力は，物理的な形で現れることがある。教会からの帰り道にオルドゥイノフは２人の後をつけるが，「不意に老人が振り返り，苛だたし気にオルドゥイノフを見た。若者は地面に打ちつけられたかのように(вкопанный)立ち止まった」(1,268)。オルドゥイノフと２人でいるところを見つかったカテリーナも，ムーリンの視線の前で「魅入られたかのように очарованная」身動きできなくなる (1,301)。これらの例はメリグノフの小説で邪悪な催眠術師ヴァシアダンが炎のような視線によって引き起こす「金縛り」の場面によく似ている。

オルドゥイノフの友人ヤロスラフ・イリッチや門番のタタール人の話によれば，ムーリンには未来を予言する力があるらしい。占いの際にも眼が重要な役割を果たす。ムーリンは訪れてきた客に対して，「役に立とうという気になったら，顔を見つめる（вглядываться）のが常だった」(1,287）という。占い師を訪問した有名人が死を予言され，それが実現するという，この手の話に典型的なモチーフも使われている。メスメリズムが予知・予言や千里眼，

降霊術などのオカルトとしばしば結びつくことを考えると，この挿話は興味深い。

ムーリンの人物像に催眠術師のイメージが隠されているのに対し，カテリーナとオルドゥイノフの人物像は催眠術にかけられるタイプ（被術者，患者）の特徴を多く備えている。それは感受性の強さと意識の不安定である。

第一に，オルドゥイノフの感受性の強さは，次のような心理描写によく現れている。「この極端な感受性（впечатлительность），感覚の無防備（незащищенность），露出（обнаженность）は孤独によって度を増したのだろうか」(1,270)。暗示にかかりやすい彼の性格は，久しぶりの外出でつまらない街の光景が不意に「何やら静かで喜ばしげな明るい感触」(1,264) に変わったという冒頭の一節ですでに描かれている。オルドゥイノフの感受性の強さは長期の孤独の後で，カテリーナと出会ったことで激しく呼び覚まされる。そもそも恋愛と催眠は心理的に類似した現象だが，ここでの見知らぬ女への一目惚れは催眠術にかかる過程そのものである。それは第1部の終わりで頂点に達する。「興奮しやすさ раздраженность」も催眠術にかかりやすい性格の特徴である。

> 彼は自分が興奮し（раздражен）度を失っているのを感じた。空想力と感受性が極端なまでに張りつめたのが分かるので，自分を信用しないことに決めた。次第に彼は一種の麻痺状態（оцепенение）に落ち込んでいった (1,288)。

第二に，不安定な意識の状態であるが，オルドゥイノフはしばしば無自覚に夢うつつの状態で行動する。例えばカテリーナ達との出会いの後，「彼は長いことあちこちの通りや人が多かったり少なかったりする色々な横町を無意識にさまよった」(1,270)。『白夜』の夢想家やラスコーリニコフのように，オルドゥイノフもペテルブルクの街をあてもなく歩くのを好む。彼の突飛な行為やちぐはぐな台詞には「無意識に бессознательно」「夢遊病者のように как лунатик」「自分の言葉も分からずに не зная слов своих」「自分の動機を理解せずに не понимая своего побуждения」といった限定が加えられることが多い。

登場人物の意識されない衝動は，悪魔の形象（демон, бес, нечистый,

окаянный）で表現されることがある。オルドゥイノフは，まるで「悪魔が耳にささやいたかのように」（1,310）ムーリンへの殺意を抱く。次の章でムーリンは，この出来事を「悪魔がそそのかしたのだ」（1,314,315）と繰りかえし説明している。カテリーナも「悪魔にそそのかされ」（1,296），意志に反して母親を傷つける言葉を吐いてしまう。

度重なるオルドゥイノフの失神・昏睡も彼の意識の不安定さを示している。彼は眠っては悪夢を見，起きては幻覚に襲われ，完全な睡眠も完全な覚醒も与えられない。A. ベームは『主婦』のプロットの半分はオルドゥイノフの見た幻覚であって現実ではないと断定している。[11]「失神する впасть в беспамятство」「麻痺状態に陥る впасть в оцепенение」「気を失う лишиться чувства」といった言葉は，意識の深層，より幻想的・催眠的な世界への下降を示し，「目を覚ます проснуться」「正気づく очнуться」「我に返る опомниться」等は意識の表層，より現実的・覚醒的世界への上昇を示す。小説全体がオルドゥイノフの魂が彷徨う意識の迷宮のような様相を呈している。

以上，ムーリンとオルドゥイノフを催眠術における対照的なタイプとして分析してきたが，実際には彼らの支配従属関係は一方的なものではなく，しばしば逆転する。カテリーナも含めて3人は心理的闘争の中にいるのであり，互いに催眠術をかけ合っているように見える。第2部2章にその最も緊迫した例を見ることができる。

ムーリンはてんかんの発作で衰弱し，視線の魔力を失っている。一方でオルドゥイノフが憎悪の視線を老人に向ける。ムーリンを憎むと同時に愛してもいるカテリーナは，老人を守るために彼の視線を遮ってしまう。

> 「見ないで！」彼の背後で声が響いた。オルドゥイノフは振り返って見た。
> 「見ないでったら，見ないでって言ってるでしょう。悪魔がそそのかしたんなら，愛しい女を憐れんでちょうだい」。笑いながらそう言うと，カテリーナは不意に背後から手で彼の目をおおった（1,305）。

乾杯によるしばしの休戦の後で，視線による闘いが再開される。今度もムーリンは意識を失っているが，眼差しの呪力はカテリーナに乗り移り，オルドゥ

イノフにムーリン殺害をそそのかす。

痛みの感覚が彼女の顔を駆け抜けた。彼女は再び頭を上げると，嘲りを浮かべ，厚かましく，さげすむようにオルドゥイノフを見るので，彼は立っているのがやっとだった。それから彼女は眠っている老人を指し示し，まるで老人の嘲笑が彼女の目に乗り移ったかのように，裂くような凍るような眼差しで再びオルドゥイノフを見やった。

「何だ。殺されるとでもいうのか」。狂乱のあまり我を忘れてオルドゥイノフは口走った。

まるで悪魔が耳にささやいたかのようだった，自分は彼女の心を察したのだと……。カテリーナの確固たる思念に向かってオルドゥイノフの心臓が笑い声を上げた……。

「美しい女よ，おまえを商人から買い戻してやろう，俺の魂が必要だというならな。まさかこの男に殺せるもんか……」

オルドゥイノフの全生命を破滅させた動かぬ笑いは，カテリーナの顔から消えなかった。無限の嘲笑が彼の心臓をばらばらに引き裂いた。われ知らず，ほとんど自覚もなしに，片手が壁に触れて，彼は老人の高価な古い刀を釘からはずした。カテリーナの顔に驚きの表情が浮かんだ。同時に，憎悪と侮蔑の色が，始めて異常な力を得て彼女の目に浮かんだようだった。オルドゥイノフは彼女を見るうちに気分が悪くなってきた……。誰かが混乱した彼の手を取って，狂気の沙汰へと駆り立てるような気がした（1,310）。

このシーンは小説中で催眠術のイメージが最も色濃く出ている個所だが，そのせいか幻想的で謎めいた雰囲気も強い。これに続く第2部3章での，ヤロスラフ・イリッチという素朴な人物を交えた談話は，事件に対するある種の謎解きになっている。ここでオルドゥイノフは「ひどくびっくりした眼でヤロスラフ・イリッチを頭から足の先まで眺めまわし」（1,315），頭がおかしくなったのかと疑われる。これは前章における視線による闘争のパロディであろう。この滑稽さとイロニーによって，小説の中の幻想性と現実性のバランスが回復されている。

3

『主婦』では「磁力 магнетизм」という語は一度も用いられていないが，作品によっては，視線のイメージが動物磁気説と直接に結びついている場合も

ある。例えば，『分身』のゴリャートキンは役所の「上司から向けられる視線の磁力 магнетизм начальнических взоров」(1,113) に動揺して口も利けなくなってしまう。『ポルズンコフ』の自意識過剰気味の主人公は「彼に向けられるどんな視線の磁力にも反応して，観察されているのを本能的に察しては即座に観察者のほうを振り向き，不安げにその視線の意味を分析する」(2,5)。他者の視線を感じて振り返るというモチーフは『黒衣の女』の例と重なるが，ここではロマンチックな，あるいはオカルト的な要素が欠如している。『分身』と『ポルズンコフ』の例では，人々の俗っぽい好奇の眼差しや他者の視線を異常に気にする人間の心理を描く際に，「マグネチズム」という語の使用が滑稽で風刺的な色彩を帯びていることが目を引く。

ドストエフスキーの作品ではロマン主義的文体とリアリズム的文体の混交がしばしば見受けられるが，『虐げられた人々』では冒頭の一章が特にホフマン風の幻想小説のパロディになっている。「ぜんまい仕掛けのような」(3,170) 奇妙な歩き方をする老人と，メフィストフェレスのように「何か神秘的な目に見えない絆で主人の運命と結ばれた」(3,171) 犬が登場する。彼らはまるで「ガヴァルニの挿絵の入ったホフマンの小説の１ページから抜け出たかのよう」で，「本の出版を宣伝する生きたチラシとなって世間を放浪している」(3,171) のではないかと語り手は想像する。物語の山場となる喫茶店がまたペテルブルクのドイツ人のたまり場であることも示唆的である。この店で老人と客の間に磁力を帯びた視線の応酬が行われる。「両者ともに，ドイツ人もその相手も，自分の視線の磁力で互いを打ち負かすことを欲し，どちらかが先に気詰まりになって眼を伏せるのを待ち受けているようだった」(3,173)。勝負は無表情な老人の勝ちに終わるが，犬の死がきっかけとなって老人も正体を明かさぬまま息絶えてしまう。

第２部１章で主人公の一人アリョーシャが話の中で動物磁気に触れる場面がある。

> 僕には何かのマグネチズムが備わってるのかな，それとも僕がどんな動物でも大好きだからってだけのことかな，分からないけど，犬には好かれるんだよ，どうでもいいことだけどさ。マグネチズムといえば，君にはまだ言ってなかったかな。ナターシャ，

このあいだ僕たちは霊を呼び出したよ。ある霊媒の家に居たんだ。これが面白くてさ，イワン・ペトローヴィチ，びっくりしたよ。僕はカエサルを呼び出したんだぜ(3,239)。

しかし彼の磁力は人ではなく犬を引きつけるものであり，降霊術への言及に至ってはナターシャによって一笑に付されてしまう。意志が弱く，一貫した話ができないアリョーシャの軽薄な性格がうまく描かれている。催眠術と降霊術は歴史的に近い関係にあるが，暗示にかかりやすいタイプと霊に取りつかれやすいタイプも一致する。

『白痴』のムィシュキン，ナスターシヤ，ロゴージンの不吉な三角関係は，『主婦』の場合とよく似ている。特にロゴージンはムーリンと同様に燃えるような目を持つ。小説冒頭の列車のシーンで彼の外見が描写されている。「2人のうちの一方は背が低く，年は27ほどで，髪は黒色に近い巻き毛で，眼は灰色で小さかったが，炎のように燃えていた」(8,5)

第2部の冒頭で，モスクワから帰ってきたムィシュキンは何者かの視線を背後に感じて振り返る。その視線がロゴージンのものであることをムィシュキンは直感し恐怖するが，まるで呪縛されたように逃げることができない。逆にもう一度あの目を見たいという欲望に駆られ，ずるずるとロゴージンの待ち伏せする場所へ引き寄せられていく (8,192－193)。

面白いことに，ムィシュキンの無意識の衝動を表すものとして，ここでも悪魔（демон）が登場する。「奇妙でぞっとするような悪魔が遂に彼にとり憑いてしまい，それ以降はもう離れようとしなかった。この悪魔が彼にささやいたのだ」(8,193)。『主婦』の場合は悪魔と言っても，日本語でいう「魔が差した」のような慣用表現に近いが，『白痴』の悪魔のイメージはもっと自由に，実際の登場人物のように描かれている。人間の潜在意識と悪魔のメタファーの系譜は，さらに『カラマーゾフの兄弟』におけるイワンの悪魔にまでたどることができよう。

19世紀中頃には，催眠術はオカルト的色合いが強すぎるとして，公式の医学界からは無視された。文学においても，ロマン主義の衰退とともに，そうした題材は時代遅れになっていった。ドストエフスキーは催眠術のモチーフをきわめて慎重に扱っている。『主婦』『白痴』等での登場人物同士の緊迫し

たやりとりでは，呪縛する視線という文学的伝統を踏襲しつつ，「磁力」という言葉は巧みに避けている。一方，メスメリズムの術語が使われる場面は必ず滑稽な雰囲気を持ち，ロマン主義文学のパロディを狙っている場合もある。そうまでしてドストエフスキーが催眠現象にこだわったのは，それが実証主義的・唯物論的な視点では見落とされがちな人間心理の深層に触れる重要な手段であったからに他ならない。実証主義的傾向の医学者は，精神病に関して，心因説よりも器質説を採ることが多かった。『悪霊』の結末で医者たちがスタヴローギンの死体を解剖して，精神異常の徴候を発見できなかった(10,516)，とあるのは示唆的である。ここには同時代の医学に対する作家の鋭い皮肉を見ることができる。

＊本稿は平成11年度リサーチ・アシスタント(RA)経費による研究プロジェクト「インターネット上のロシア語リソースの活用に関する研究」(研究代表者：浦井康男；RA受入教官：安藤厚)の成果の一部である。プロジェクトの立案と技術面の指導は浦井が行い，本論文の執筆は，安藤の指導のもとに，越野が担当した。

注

1 「催眠術 hypnotism」の歴史については，*Ellenberger H. F.* The Discovery of the Unconscious: The History and Evolution of Dynamic Psychiatry. New York, 1970（アンリ・エレンベルガー『無意識の発見』木村敏・中井久夫監訳，弘文堂，1980）を参照。「メスメリズム」と文学の関係については，*Tatar M. M.* Spellbound: Studies on Mesmerism and Literature. Princeton UP, 1978（マリア・M・タタール『魔の眼に魅されて―メスメリズムと文学の研究』鈴木晶訳，国書刊行会，1994）を参照。ロシアにおける「メスメリズム」の歴史については，*Громбах С. М.* Пушкин и медицина его времени. М., 1989. С. 132－151；越野剛「ロシア文学とメスメリズム」，『ロシア語ロシア文学研究』31,1999,15－29頁を参照。

2 *Греч Н. И.* Черная женщина. СПб., 1838. Т. 1. С. 108.

3 *Мельгунов Н. А.* Кто же он//Русская фантастическая проза эпохи романтизма. Л., 1990. С. 247－248.

4 *Одоевский В. Ф.* Косморама//Русская фантастическая проза эпохи романтизма. С. 312.

[5] *Достоевский Ф. М.* Полн. собр. соч. Канонические тексты. Петрозаводск, 1995. Т. 1. С. 474.

[6] *Яновский С. Д.* Воспоминания о Достоевском//Ф. М. Достоевский в воспоминаниях современников. М., 1990. С. 239;『ドストエフスキー 同時代人の回想』ドリーニン編，水野忠夫訳，河出書房，1966，89頁。

[7] *Врангель А. Е.* Из «Воспоминания о Ф. М. Достоевском в Сибири» //Ф. М. Достоевский в воспоминаниях современников. С. 352.

[8] *Gibian G.* C. G. Carus' "Psyche" and Dostoevsky//The American Slavonic and East European Review. Vol. 14. 1995. P. 382. その他，*Rice J. L.* Dostevsky and the Healing Art: An Essay in Literary and Medical History. Ann Arbor, 1988. P. 133－146も参照。

[9] これらの単語の用例は，ペトロザヴォツク大学のВ. Н. Захаров教授のグループがインターネット上に公開している «Конкордансы всех произведений Ф. М. Достоевского» (http://www.karelia.ru/~Dostoevsky/dostconc) を利用して集めた。

[10] 以下，ドストエフスキーの作品からの引用は，*Достоевский Ф. М.* Полн. собр. соч.: В 30 т. Л., 1972－1990. Т. 1－30により，（ ）内に巻号と頁数を記す。翻訳は越野による。

[11] *Бем А. Л.* Достоевский: психоаналитические этюды. Берлин, 1938. С. 83－99; *Бем А. Л.* Драматизация бреда («Хозяйка» Достоевского)//О Достоевском. I. Прага, 1929. С. 81－93.

Косино Го

Достоевский и гипнотизм

К описанию человеческой психики в произведениях Достоевского часто подходят с точки зрения фрейдского психоанализа. Однако исторически гораздо важнее отношение писателя с современной ему медициной о человеческой психологии. Гипнотизм (животный магнетизм), основателем которого был Ф. А. Месмер, уже в XIX веке открыл многие явления подсознания и оказал влияние на романтическую литературу и натурфилософию того времени. Достоевский узнал его через теорию бессознательности К. Г. Каруса и литературные произведения Э. Т. А.

Гофмана, О. де Бальзака, Н. Греча, В. Одоевского и др. В них типичными являются два мотива: магнетическая сила взгляда и бессознательные поступки и галлюцинации в гипнотическом состоянии.

В этом отношении мы должны прежде всего проанализировать раннее произведение Достоевского «Хозяйка». В основе его сюжета —— психологическая борьба взглядов между тремя персонажами: Ордыновым, Катериной и Муриным. В частности, особенно злобными глазами выделяется Мурин. Если он играет роль гипнотизера, то гипнотизируемым становится Ордынов, который часто поступает бессознательно и видит галлюцинации. Подобные мотивы повторяются в сюжете рокового треугольника «Мышкин —— Настасья —— Рогожин» в «Идиоте». Особенное сходство можно отметить между Муриным и Рогожиным, в описании которого также подчеркиваются «огненные глаза».

В середине XIX века гипнотизм был подчеркнут резкой критике и обвинен в мистицизме. Так, в психологических описаниях в «Хозяйке» и «Идиоте» Достоевского есть элементы месмеризма, но он прямо не называется. В «Двойнике» и «Униженных и оскорбленных», напротив, эффектно использует это слово в комических ситуациях, придавая тексту характер пародии на романтическую литературу. Можно утверждать, что гипнотизм обращал внимание писателя на подсознание человека, которое не интересовало его современников материалистического и позитивистского направления.